来（らい）・ぶらり　電子図書館サービスを活用しよう!!

宮崎公立大学附属図書館では電子書籍、データベース、電子ジャーナルなどのさまざまな電子図書館サービスを提供しています。「電子書籍」は蔵書検索（OPAC）からも利用可能！！

電子書籍

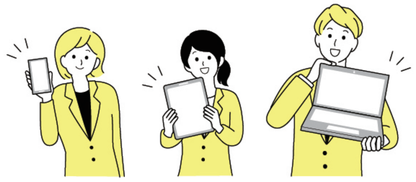
- Maruzen eBook Library（丸善雄松堂）
- KinoDen（紀伊國屋書店）

※学内ネットワークにつながっている端末から利用可能
※アカウントを作成すると学外からもアクセス可能

閲覧可能な資料の例

Maruzen eBook Library

KinoDen



データベース（DB）

- 新聞記事検索 DB
  （毎日、朝日、宮日、日経テレコンなど）
- 雑誌記事検索 DB
  （magazineplus、Web OYA-bunko）
- 百科事典 DB
  （ブリタニカ・オンライン・ジャパン）

※本学は国立国会図書館の図書館向けデジタル化資料送信サービスの参加館となっています。
詳しくは図書館カウンターまで！！

電子ジャーナル

- JSTOR Archive Collection
- 外国雑誌オンラインジャーナルは
  24* タイトル（*2023 年度時点）

※オンラインジャーナルのリストは図書館HP にあります！

その他の情報については
図書館の HP に掲載しています。
ぜひ一度ご覧下さい！！

▲HP へのアクセスは
こちらから!!

表紙のイラストは“AI”で原案作成！

今回の Camellia の表紙の原案は Adobe Photoshop の AI に「AI と人間の未来ー共存か？それともー」というワードで問いかけて作成しました。候補は次の 3 つ！あなたならどれを選びますか？

原案となった画像です

宮崎公立大学附属図書館 広報紙『Camellia』Vol.12（2024年3月15日）
発行：宮崎公立大学附属図書館 〒880-8520 宮崎市船塚1 丁目1-2　TEL0985-20-4814 https://www.miyazaki-mu.ac.jp/library/

Camellia Vol.12

ー図書館広報紙ー

AIと人間の未来
ー共存か？それともー

【CONTENTS】

コラム：AIと人間の未来 ……P.2～3
執筆／村上先生・梅津先生・倉先生
来・ぶらり ……P.4
電子図書館サービスを活用しよう!!

宮崎公立大学附属図書館

本学の3専攻から、テーマにちなんだ当館所蔵の図書を紹介します。

AIと人間の未来 ―共存か？それとも―

言語・文化専攻

―人文学の本質と語学を修得―

准教授　村上 幸大郎（専門：英米文学）

AIロボットの「こころ」

ドラえもんの誕生日は 2112 年 9 月 3 日だそうである。数年前までは到底実現できないものだと思っていたが、近年の AI 技術の目覚ましい発展を考えると、あと90年もあればひょっとすると…という気もしてくる。しかし、実際にドラえもんのようなAIロボットが誕生した場合、彼らの「人権」に対する問題は考慮すべき課題になると思われる。

2017 年にノーベル文学賞を受賞したカズオ･イシグロの最新作『クララとお日さま』は、近未来を舞台にした、AIロボット（作中では AF=Artificial Friend「人工親友」とされる）が主人公の物語である。子どもの遊び相手となることを目的に作られたAFのクララは、病弱な少女ジョジーのもとに引き取られる。クララが人間や社会のことを学びながら、次第に衰弱していくジョジーを救うために尽力する様子が、彼女自身の視点から語られる（以下核心部分に触れるので、結末を知りたくない方はここで隣のコラムに移ってください）。

読者が自己犠牲を厭わないクララの献身に胸を打たれることは間違いない。しかし、この作品は同時に AFをめぐる倫理的なテーマを扱っている。実はクララの購入を本当に望んでいたのはジョジーの母親であることが発覚するあたりから、物語は急展開する。娘の死を予期した母親は、精巧なジョジーのロボットを用意し、その器に彼女の所作や思考を完璧に学習したクララのAIを移植しようとしていた。娘になり替わることだけをAFに期待している母親は、クララ自身にも感情があることから目を背けようとする。初めて自分の真の「用途」を知り、移植が成功したらいまの自分の体はどうなるのかと尋ねるクララに対し、母親は「どうでもいいことじゃない？だって、ただの作り物だもの」と、彼女から「目をそらして」言う（304ページ）。彼女から目をそらす母親の態度からは、クララを家電やコンピューターのようにモノとして消費することに葛藤を感じていることが窺える。

クララはジョジーになり替わることに同意するが、結果的に彼女の健康は回復し、母親の懸念は杞憂に終わる。クララはジョジーの成長を見届けた後、最後はゆるやかに機能を失って廃棄場で「一生」を終える。廃棄場で再会した AF 販売店の店長に対し、クララは仮に完璧にジョジーを学習できたとしても、自分は「彼女を愛する人々」の心にある「ジョジーへの想いのすべて」に作用をもたらすことはできなかっただろうと言う（431ページ）。クララの言うように、「模造品」を「オリジナル」同様に愛することは、将来においても難しいだろう。ジョジーになることはできなかったが、彼女の親友になれたことにクララは満足している。しかし、がらくたに囲まれた廃棄場に捨て置かれる彼女を見ると、読者は「本当に彼女は幸せだったのだろうか」という複雑な思いに駆られる。

「ロボットにこころはあるのか」、「ロボットは人を完全に再現できるのか」といった問いにイシグロは明確な答えを提示していない。『クララとお日さま』は読後に将来の AI ロボットをめぐる問題について考えさせる、味わい深い作品である。

『クララとお日さま』
カズオ・イシグロ著；
土屋政雄訳／早川書房
〈閲覧室：933.7¦¦I73〉

メディア・コミュニケーション専攻

―メディアと人間の社会行動を研究―

准教授　梅津 顕一郎（専門：社会学）

AI 版「新作」が意味すること ～生成ＡＩが喚起する人々の欲望～

最近、すでに故人となった表現者の「新作」が話題となっている。ビートルズ「最後の新曲」Now&Then 、手塚治虫『ブラック・ジャック』の新作プロジェクトがそれである。無論これらは生成 ＡＩの技術を導入して作られたものだ。Now&Then ではデモテープから故・ジョン・レノンのボーカルを取り出すことに、『ブラック・ジャック』では手塚氏らしい画風、ストーリーを用意するために ＡＩ技術が導入されている。

まるで彼らの「死」自体が存在しないかのようなこれらの試みは、ファンの聞きたい声を聴き、見たいものを見る欲望と、提供者サイドの聞かせたい声を生成し、見せたいものを配信する欲望とのコラボレーションが、生成 ＡＩの登場によって、高精度で実現したことを示している。実際この二つの作品に、好評価を付けるファンも少なくない。

ファンが故人（表現者）を偲びつつ、そのパフォーマンスや表現物に、現実にはかなわぬことを夢想し、その手助けを ＡＩがする。これが成熟したファン文化における、ある種の信頼関係のもとで行われる限り、問題は小さいだろう。しかしこれからますます進化する ＡＩ技術の下で、この範囲を大幅に逸脱する表現行為がいくらでも可能であることを、これらの作品は証明してしまった。無論それは人々を幸せにするものだけではない。反社会的表現の蔓延、剽窃、反事実的捏造。危険な表現行為が問題視される可能性は今後続くだろう。

しかし私は、それらの表現がもたらす社会的害悪よりも、それらの表現を欲する欲望の在り方そのものに、問題の本質を見る。際限なく「見たいもの」「聞きたいもの」に集中させられることで、我々の欲望は、より強化されていく。しかし裁判や議会制民主主義など、人間知性への信頼を基本とし、参与者個人の責任ある判断やふるまいが要求されるシステムにおいては「見たい」「見たくない」にかかわらず、事実の的確な把握と、理性的な判断に努めることが必須事項となるはずだ。こうした社会運営の大前提と、今、欲望が解放されようとしている方向性は、大きく矛盾する。

無論私は、このことをもって、欲望に溺れることなく事実認識の客観性と理性的判断を順守せよ、などというアナクロな「近代原理主義」を主張するつもりはない。しかし、民主主義の型崩れに対応するかのように出現してきたポピュリズムが、結局は「国家エゴ」「民族エゴ」の対立を際立たせ、ますますの世界的分断を生んだ現状に対して、「危険」以上の破滅的なものを感じざるを得ないのである。

政治が人々の「見たいもの」「聞きたい声」の提供に焦点化し、「虚構」も取り入れながらの動員ゲームに終始することに満足する人、あるいはその真っただ中に身を置くことを欲望する人は、少なからずいる。そしてその欲望は、彼らの中では「正義」そのものなのである。内向きの欲望がもたらす内向きの正義。そこに今後 ＡＩ技術が本格的に加担し始めたとき、社会はどうなってしまうのか。

こうした未来に対して、今のところ肥大化し続ける欲望を理性によってコントロールする道を模索していくしか対抗策はなさそうだ。メディアコミュニケーションの観点からこの課題を考えるとき、評論家の宇野常寛が『遅いインターネット』(2020年) において展開した、SNS社会批判は一読に値する。宇野は、個々人の自己の物語のもとに他者や社会の物語が編入されてしまう SNS コミュニケーションの本質を指摘する。

我々のうちに潜む欲望は果てしない。宇野が同書終盤において提案する、書くことと読むことの往復に終始したインターネットの原点への回帰は、正直簡単なことではないだろう。そんな思いを巡らせながら、ついつい今も、Now&Then を聴きつつこの文章を書いている。

『遅いインターネット』
宇野常寛著／幻冬舎
〈閲覧室：311.7¦¦U77〉

国際政治経済専攻

―世界の政治経済を多角的に研究―

准教授　倉 真一（専門：社会学、国際社会学）

AIみたいな人間にならないために

世の中、AI ブームらしい。特に AI（人工知能）のようなテクノロジーのブームでは、それらに対する期待も不安もどこか過剰に語られてきた。テレビだってインターネットだって、普及の最初期はみんなそうだった。「AIは人間を超えるか」といった問いも、きっとこの過剰な期待と不安がない交ぜになった感情の現れなのだろう。

しかし、よく考えてみて欲しい。そもそも当の超えられる「人間」について、私たちはどれほどのことを知っているのだろうか。あるいは人間の「知能」について、何を知っているのだろうか。ＡＩを問うよりも先に、「人間とは何か」という旧くて新しい問いに立ち返るべきではないのか。

郡司ペギオ幸夫の『創造性はどこからやってくるか－天然表現の世界』（ちくま新書）は、そうした問いへの新たな応答といえる。ちなみに同じ著者の『天然知能』（講談社選書メチエ）がいわば原論なら、同書は著者自身によるアート創作を通じた「天然知能」の理論実践編という位置づけになるだろうか。

著者は、「いわゆる機械で実装された知能という意味での人工知能に留まらず、得られた経験やデータだけから推論し判断する知性のあり方全体」を「人工知能」と捉えるのに対して、「想定もしなかった自分にとっての外部を受け入れる、徹底して受動的な、しかし、それこそが創造的」な知性のあり方として「天然知能」を位置づける。

「天然知能」を特徴づける「徹底して受動的＝創造的」とは、意図しない形で「わたし」の外部から降りてくるインスピレーションをイメージすると分かりやすいだろう。こうした「外部」を召還し創造する形式（装置）を、著者は「トラウマ構造」と呼んでいる。トラウマ構造とは、二項対立的なものが「わたし」を支配しているとき、「対立する二項を共に成り立たせる肯定的矛盾と、共に否定する否定的矛盾が共立」することを指している。

ここでは著者自身が取り上げている自然科学における創造（天然表現）の事例でみてみよう。いまでは大陸が移動していることは常識であるが、ウェーゲナーが大陸移動説を発表した当初、その学説はまったく問題にもされなかった。あまりに斬新すぎたためである。では他の地質学者たちが考えもしなかった大陸移動という着想を彼はどのように得たのだろうか。当時、大陸と海洋の関係を説明する学説は「地向斜」の造山運動、すなわち「垂直方向の運動」だけで、他方には「現在の大陸の海岸線」があり、両者を結びつけても整合的な説明はまったく出来なかった（肯定的矛盾）。このとき、両者をともに否定する（「垂直運動」⇒「水平運動」／「現在の大陸の海岸線」⇒「過去には海岸線はなかった（１つの大きな大陸だった）」）という否定的矛盾が閃き、そこに「大陸移動」というアイデアが降りてきた。

郡司は、根拠（エビデンス）のないウェーゲナーの大陸移動説を単なる偶然の思いつきで無価値とみなす人たちを、芸術作品の価値を「主観」に過ぎないという人びとと同列に批判している。まるでどこかの論破王をみているようだが、そうした AI みたいな人間には「創造とは賭け」であることがわからない。「我々は、創造の当事者になることによってのみ、生を感じることができる…（中略）…しかしそれを実現するためには、我々は賭けるしかない」のである。

『創造性はどこからやってくるか』
郡司ペギオ幸夫著／筑摩書房
〈閲覧室：141.5¦¦G94〉